

## 『菩薩地』における衆生観

岡田 英作（京都大学）

本発表では、『瑜伽師地論』の一部を成す『菩薩地』における衆生観について論じる。『瑜伽師地論』は瑜伽行派の初期の根本典籍であり、『菩薩地』では大乘の修行者たる菩薩の実践を詳述している。大乘仏教は、その特徴として、菩薩が自ら仏陀と同じ悟りを目指す自利と一切衆生を救済する利他との円満を理想とする点が強調されるが、これは『菩薩地』も例外ではない。しかし、瑜伽行派は、悟りへの可能性の問題に対して種姓（gotra）という概念を用いて独自の説を展開しており、衆生の中に悟り得ない者がいることを説くことで一般に知られている。ここで、菩薩が利他の実践として救うべき衆生と悟りの資質たる種姓との関係が問題となる。『菩薩地』もまた、悟り得ない衆生の存在を認めているのか。

前半では、『菩薩地』における一切衆生（sarvasattva）という語に注目する。この語が現れる文脈を検討すると、一切衆生は、菩薩との比較対象、菩薩にとっての利他の対象に大別される。本発表で問題となる、利他の対象としての一切衆生は、「発心品」での誓願に端を発する。菩薩は、利他の実践として一切衆生を、四摂事などを通じて成熟させ、教化し、最終的には涅槃や如来の智を獲得させるのである。

後半では、利他の対象としての一切衆生が具体的には誰なのかに焦点をあてる。「菩薩功德品」が言及する「意地」所説の衆生の部類に基づくと、衆生には五趣、すなわち人間以外の者が含まれ、人間の細分類としては三乗における修行者、如来なども含まれる。一方、「成熟品」は、利他の一環として行われる衆生を成熟する行のうち、成熟の対象となる衆生について、人（pudgala）だけを扱っており、仏菩薩にとっては、三乗何れかの種姓に立脚した者は各乗において、種姓に立脚しない者は善趣に赴くために成熟させられる、というように種姓の種類や有無による分類を示している。「菩薩功德品」は、同じ行のうち、教化の対象となる衆生について、一切衆生を対象としながらも、衆生と教化対象との要素の差異に関する問答を通じて、教化対象の要素を種姓に立脚した者に限定している。衆生を成熟する行では教化も成熟の一部のため、教化対象もまた人に限られると考えられる。ただし、種姓を直接知覚できない菩薩にとっては、究極的な苦から脱し得る資質があると観る者こそが実際の教化対象となる。

以上のように『菩薩地』では、一切衆生に涅槃や如来の智を獲得させようと誓願を立てるが、その一切とは限定された、「種姓に立脚した」一切衆生を想定できる。この理解は『菩薩地』注釈文献からも支持される。限定された一切に関連して、『瑜伽師地論』「摂事分」は一切を 2 種に分けるが、このうち「一部の一切（少分一切）」について、後代の瑜伽行派文献『仏地経論』は、一切衆生に仏性があるという文言に適用している。しかし、後代の展開がどうであれ、『菩薩地』の立場としては、教化できない、種姓に立脚しない者に対しても、捨て置くことなく、善趣への成熟という道を開いている。いずれ教化対象となるのかは明らかではないものの、捨て置かれる衆生はいないと言うことができよう。

キーワード：種姓、成熟と教化、少分一切